

所報

No.135
令和3年10月27日

富山県総合教育センター

富山市高田525

E-mail:center@tym.ed.jp(代表)
URL:http://center.tym.ed.jp/

目次

- 学ぶ夏（夏の研修より）…………… 1
- 夏の研修を振り返って…………… 2・3
- センター事業より…………… 4
- 年取るごとに自らを省みて…………… 5
- 随想…………… 5
- 連載「知って得03」…………… 6

学ぶ夏

教育研修部



初任者・新規採用教員研修会 危機管理
8月2日
講義「学校事故の予防と対策」



2年次教員研修会 学習指導2
8月11日
「グループ協議」



理科教育講座（自然観察 中級コース）
8月24日
「地層の観察（上市町）」



プログラミング研修会（Pythonの初歩）
8月10日
演習「micro:bitを使ったLED制御プログラム」

科学情報部



教育相談部



学校カウンセリング講座（みんなが生きるチーム支援コース）
8月25日
演習「児童生徒理解のためにリソース抽出シートを作成」



特別支援教育講座（基礎から学ぶ自立活動実践コース）
7月27日
協議「個別の指導計画と自立活動の指導の実際」

夏の研修を振り返って

教育研修部

初任者研修会(小・中・義・高・特)・新規採用教員研修会(養・栄)「生徒指導」 —「コミュニケーション」と「仲間づくり」—

- ◆日時 令和3年7月29日(木) 9:15～12:00
- ◆講師 公益財団法人 富山県健康づくり財団 事務局次長 新田 将人 先生
- ◆内容

「生徒指導」は今年度新設された研修です。初任者研修会と新規採用教員研修会の全校種の受講者が富山県総合体育センターの大アリーナに集合して研修しました。

「コミュニケーション」「仲間づくり」をキーワードとして、課題に対して仲間とコミュニケーションを取りながら解決する「仲間さがし」や「一本指ペン渡し」等の体験活動に取り組みました。また、講師の方から、環境設定の大切さ等、児童生徒との人間関係づくりにおいて考えるべきことに関する講義を聞きました。

受講者は、講師の先生の説得力ある話にメモをとったり、活動に意欲的に参加したりして、人間関係づくりへの理解を深めました。



講師の方の話に耳を傾ける



体験活動

受講者の声

- ◎グループのメンバーが同じ目標に向かって課題に取り組むことで、グループが居心地のよい場所になっていくを感じることができた。
- ◎体験を通して、学校生活においても、活動がうまくいった時、うまくいかなかった時、その理由を生徒に考えさせる場を設けることで、生徒自身が気付くようにすることが大切だと思った。
- ◎普段関わりのない校種の先生方とも話したり活動したりすることができてよかった。

科学情報部

「児童・生徒の情報活用能力育成研修会(一人一台端末の活用コース)」 — 道具としてのICT —

- ◆日時 令和3年8月2日(月)
- ◆講師 信州大学学術研究院教育学系 助教 佐藤 和紀 先生
- ◆受講者 小学校46名、中学校5名、高等学校3名、特別支援学校6名
- ◆内容

午前、佐藤先生に「一人一台端末を活用した授業について」と題し、一人一台端末の効果的な活用方法について講演していただきました。午後は、講演の内容を参考にした教材作りと協議を行いました。

受講者にはZoomを使ったオンラインで参加していただき、画面共有やブレイクアウトルームを利用して研修を実施しました。



オンラインによる研修の様子

◆研修講師より

- ・ICTは特効薬でなく、あくまでも道具である。道具は使い慣れてからその効率や便利さが分かる。
- ・ICTを使い慣れるためには、使う機会を増やすことが近道で、ICTを毎日繰り返し使うことが大切である。
- ・ICTを毎日使うためには、授業内容を考えるのではなく、ICTを使う場面(情報を収集して整理する、自分の考えを深める、考えたことを表現する、知識・技能の習得を図るなど)を考えるとよい。
- ・ICTを効果的に使うことで、問題の解き方、学び方までも共有できる。またICTを用いた協働作業により、情報の収集、整理、分析、再構築等を行うことができる。

受講者の声

- ◎佐藤先生の講演が大変よかったです。佐藤先生のおっしゃることが一つ一つ腑に落ちると同時に、今後も少しでも効果的で深い学びにつながるよう、毎日コツコツと使い続けていきたいと思いました。
- ◎私自身、端末を使うことがあまり得意ではないため、子供たちにもうまく指導できていない部分もあったのですが、今日の研修を終えて、2学期から端末を活用して、いろいろな学習に役立てていきたいと思いました。

学校カウンセリング講座(人間関係を育む学級集団づくりコース) 第2回

— 対人関係ゲームの取り組みを通じて —

このコースは、学級集団の中に自分らしく生きられる関係性を育むことにより、児童生徒や教師が互いに認め合い、自己の成長を目指した学級集団づくりについて考えることを趣旨とし、第1回は6月、第2回は8月に実施しました。第2回について紹介します。

◆日時 令和3年8月3日(火)

◆講師 東京造形大学 講師 井ノ山 正文 先生

◆演題 「子どもが育ちあう学級集団づくり
～対人関係ゲームの取り組みを通じて～」

◆内容

午前の井ノ山先生の講義では、グループアプローチを用いたはたらきかけは、学級集団の状況を把握し、意図をもって計画的に行う必要があることをお話いただきました。

午後の演習では、子供の捉え方、関係性、当事者性の変化によって集団との相互の関わりが変化することに気付くために、対人関係ゲームの中の「折り合うゲーム」のひとつである「協同絵画」を体験した後、自分を振り返りました。



紙風船をやさしく送ってやりとりする
「ふわふわ」



言葉を使わずにグループで
絵を完成させていく「協同絵画」

受講者の声

- ◎対人関係ゲームをつかったはたらきかけでは、教師がねらいをもって行うことや学級集団の状況に応じてゲームの構成や順番も考える必要性を感じました。自分の学級を振り返ることができるとてもよい機会となりました。(小学校教諭)
- ◎学級の子供同士の関係をつなぐことによって、一人一人の個性を生かし、互いに認め合う雰囲気をつくることにつながると感じました。(中学校教諭)
- ◎教師自身の関わりや子供の捉えが学級の間人間関係に影響を与えていると気が付きました。(小学校教諭)

学校で取り組む特別支援教育研修会

— 合理的配慮の提供に向けて —

◆日時 令和3年8月4日(水)

◆講師 午前：新潟大学教職大学院 教授 長澤 正樹 先生
午後：西部教育事務所 小中学校巡回指導員
柳田 由紀 先生

◆演題 午前：「特別支援教育からインクルーシブ教育へ」
午後：「合理的配慮の提供に向けて」

◆内容

午前の長澤先生の講義では、インクルーシブ教育、ユニバーサルデザイン、合理的配慮の提供など特別支援教育に関わる内容についていろいろな画像やクイズ形式での演習を含めてお話いただきました。

午後の柳田先生の講義では、小中学校及び高等学校の合理的配慮の事例について分かりやすく説明していただきました。その後、あらかじめ受講者から募った協議題に基づいて合理的配慮に関する班別協議を行いました。



オンライン講義の様子



班別協議の様子

受講者の声

- ◎合理的配慮は一方的なものでなく、教師、本人、保護者と話し合うことが必要であると理解できました。(小学校教諭)
- ◎高校入試における合理的配慮の事例について大変参考になりました。(中学校教諭)
- ◎合理的配慮について校内の先生方に理解してもらう必要があると思いました。少しでも多くの教員に関心をもってもらえるよう工夫して伝えていきたいです。(高等学校教諭)
- ◎学校での事例や、障害種別ごとの例を踏まえながら説明していただいたのでとても分かりやすかったです。(特別支援学校教諭)

センター事業より

外国人児童生徒教育実践講座

(主管 教育研修部)

本講座は、外国人幼児児童生徒に対する適応指導、日本語指導・教科指導等についての指導力向上を図るための研修会です。第1回は、富山市立柳町小学校において協力校研修、第2回は、総合教育センターにおいて研修、第3回はオンラインによる研修を実施しました。受講対象者は、国公立、私立、全ての校種の教員及び外国人支援員・外国人相談員です。

日 程	内 容
第1回 6月22日(火)	①授業参観「外国人児童生徒への日本語指導、教科指導の実際」 ②情報交換・協議「日本語指導・教科指導について」
第2回 7月28日(水)	①講義・演習「外国人児童生徒等の実態把握」 ②情報交換・協議「外国人児童生徒等への対応について」
第3回 8月24日(火)	①講義・演習「日本語指導について」(オンライン研修)



講義・演習
「外国人児童生徒等の実態把握」

受講者の声

- ◎一人一人の外国人児童生徒の家庭環境、日本への来歴、性格、学習の状況等をしっかり把握し、日々の様子を見守り、成長を促す手立てを考え抜くことが大切だと思った。
- ◎課題や学習に関する指導を心がけるだけでなく、児童が日本の社会で生きていくための力や意欲を育めるような接し方が必要だと教わった。

理科に関する生徒実習

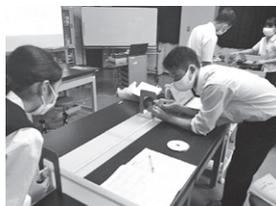
— 探究心を呼び起こす観察・実験 —

(主管 科学情報部)

科学情報部(理科)では、7月に高校生を対象にした観察・実験の実習を行っています。生徒は、一日に2講座を選択し、学科・コースの特性に応じて科学への理解を深めています。

今年度は、富山東高校(自然科学コース)、富山いづみ高校(看護科)、入善高校(普通科自然科学コース)、高岡高校(理数科学科)、南砺福野高校(普通科探究・理系コース)から総数180名の生徒が参加しました。

参加した生徒からは、「学校の授業だけでは分からない理科の面白さが分かった」「難しかったけど楽しくてやりがいを感じた」「カエルの解剖は忘れられない貴重な経験になった」「自分の科学に対する世界観が広がった」という声が聞かれました。



光ディスク(CD、DVD、BD)のトラックピッチの測定(物理)



医薬品の合成(化学)



ウシガエルの解剖(生物)



アンモナイトの研磨と内部構造の観察(地学)

不登校児童生徒に対する支援推進事業 体験交流活動「プレイパーク」

(主管 教育相談部)

文部科学省補助事業「不登校児童生徒に対する支援推進事業」の一環として、教育相談部では毎年、県内の小・中学生とその保護者を対象に、体験交流活動を実施しています。

今年度の第1回は、7月8日(木)午前10時から午後2時まで、富山県総合教育センターを会場に「プレイパーク」を行いました。

段ボールタワーを作るなど、広い空間で遊ぶ「アドベンチャー広場」、ストローカイトや紙コップロケット等を作って遊ぶ「つくってあそぼう広場」、うちわやプラ板等の工作を楽しむ「つくろう! わくわく広場」、珍しい楽器やグラスハープで楽しむ「音とあそぼう広場」の4つの広場を、教育センター内のいろいろな場所に設け、約20種類の体験コーナーを開設しました。

児童生徒は、自分のやりたい活動を自由に選び、参加しました。「アドベンチャー広場」の壁画作りでは、A1大の白の段ボール紙に、刷毛やローラーを使って思い思いに色や形を描き、表現を楽しみました。

学生ボランティアコーナーでのバルーン風船アートや、ALTとのフィリピン格闘技、NPO法人ヴィストカレッジの方々の手ほどきを受けてのプログラミング・VRの体験も楽しみました。

児童生徒たちは、創作活動や体験活動に取り組み、自分を表現したり人との交流を楽しんだりすることで、人とのつながりを感じていました。



ヒスイ海岸の石の中から、自分のお気に入りの石を探す
「ヒスイ海岸の石ひろってね」



大きな紙に思い切り描く
「壁画をつくろう」

年取るごとに自らを省みて…

研修顧問 山崎 弘一

数年前から書いている「今日の言葉」。読み返すと、自らへの戒めとして書かれたものが少なくない。

<某日> 何気ない言葉にも

突然の来訪に驚き、慌てて片付け。久しぶりに脳天を鴨居にぶつけてしまい蹲（うずくま）る。注意一秒怪我一生。でもこれはあくまで自分の体のこと。「舌をもって滑るより足をもって滑る方がよい」とう諺がある。うかつに口を滑らせ、言ってはならないことを言ってしまう。その結果、人の心を傷つけ、思わぬ事態を招いてしまうことがある。怪我は治せるが、言葉による心の傷は取り返しがつかないもの。何気ない言葉にも細心の注意が必要だ。

<某日> 事を進めるに当たって

もう十分美しいのに、さらに不要の飾り立てを行うことは無駄であり、かえって全体のバランスのとれた美しさを損ねてしまう。これを「屋上屋を架す」と言う。出来た屋根の上にさらに新たな屋根を架しても無駄なこと。月夜に提灯はいらぬ。豆腐に鏝（かすがい）は意味がない。二階から目業は効果がない。事を進めるに当たっては、全体の状況を的確に捉え、先を見通して、無駄のない適切な対応を。

<某日> 話に着せる袈裟は

何事においても大袈裟に話す人がいる。疑わしいことでも、真剣な顔つきで大きな声で話されると、つい信じてしまう。自らを大きく見せたい、他人から流石と言われたという心の現れか。袈裟は色あせた布切

れを身体の大きさに合わせて縫ってつくるものだという。話に着せる言葉という袈裟は大きすぎない方がよい。もっとも、大事を矮小化して隠す「小（ちい）袈裟」はもっと悪いが。

<某日> 思いやりに感謝して

歐陽脩曰く「平生作る所の文章。多くは三上に在り。乃ち馬上・枕上・廁上なり」。今も三上は、物事を考えるのに適した場所かもしれない。偶然入ったトイレの壁の貼り紙に書かれた五七五の標語「忘れまい、次の人への思いやり」。廁の中で、目を閉じ静かに思いを巡らす。「忘れまい、近所の人への思いやり」「忘れまい、困った人への思いやり」「忘れまい、父母子供への思いやり」「忘れまい、支える妻への思いやり」…これまでの数々の思いやりに感謝して。

<某日> 初心な心で

「ほととぎす いつ聞くとても 初音かな」
毎日の生活の中で、いつも見ている物や人や景色、いつも聞いている声や物音は、前に聞いたことだから、前に見たことだからと思ってしまう、大事な瞬間を捉える目や耳が閉ざされてしまうことがある。いつものことでも、初めて見る、聞くという思いで見れば、初心な心で受けとめることができ、心に鮮やかに映るもの。初心忘るべからず。仕事にも通じることと思つて。

年取るごとに自らを省みることが多くなって…

随想

子供たちに教えられて

教育相談部長 中川 邦章

「教員は世間の常識を知らない」「町内会の嫌われ者」などという声を耳にすることがよくあります。振り返ると自分もそうだったと思い当たる節があります。

23歳で富山県の教員に採用され、県外から実家に戻ってきました。うちの町内には昔から伝わる獅子舞があり、その活動は社会人になった男性が担うしきたりになっています。しかし、平日の帰宅はいつも21時過ぎ、土日は全て部活動の指導があり、時間がないことを言い訳に、獅子舞の活動に呼ばれても全く顔を出すことなく5年近く過ぎていました。

そんなある年、勤務していた中学校の校区の春祭りの日、学校にも獅子舞が演舞にやってきました。正面玄関前で獅子舞を操る男衆を見てはっとしました。その中に、3月に中学を卒業したばかりのK君の姿があったのです。K君は明るい人柄で、バスケットボール部に所属していましたが、勉強はあまり好きではないのか授業中には居眠りをして注意されることもありました。そんなK君が男衆の一員として勇壮に活躍している姿を見て衝撃を受けました。「教え子がわずか15歳で町内の獅子舞を支えている。それに比べて、30歳近くにもなって自分は何をやっているんだ。仕事が

忙しいことを言い訳に地元の活動には一切、顔を出していない。こんな教員が生徒たちの前に立っているのか？」

教え子に「教えられ」、ようやく目が覚めた私は、その年の秋祭りから町内の獅子舞練習に顔を出し始めました。以来25年間、獅子舞活動に携わり、50歳過ぎで引退しました。獅子舞を続けたことで、年齢が10～20歳近く離れた先輩方や若者たちと職業を越えて交流し、視野を広げるとともに人間関係を築くことができたと思っています。3年前からは地区の自治会役員を引き受け、これまで以上に町内、地区の活動に参加することで、罪滅ぼしをさせていただいています。

拙文を読んで下さった方々にお尋ねします。「あなたが子供たちに教えられたことは何ですか？」





「昆虫食」いかがでしょう！

科学情報部 研究主事 二塚 裕子

秋になる季節の変わり目、草むらでバッタがとぶ姿をよく見かけるようになりました。写真のバッタは9月初旬に見つけた体長7cm程のショウリヨウバッタです。ショウリヨウバッタのメスは日本に分布するバッタの中では最も大きく、体長が10cm以上のものも存在します。

さて、みなさん昆虫を食べた経験はありますか？日本でも長野県をはじめ、昆虫食文化が根付く地域があります。昆虫が食料として注目される点は、高タンパク質で、低糖質な上、必須アミノ酸等が多く含まれていること等です。また家畜と比較すると、飼料や水の必要量ははるかに少なく済むため、近年では、持続可能な開発目標であるSDGsの観点からも関心が高まり、研究が進んでいます。

ところで、昆虫はおいしいのでしょうか？昆虫食への好奇心から、この夏に初めて試食しました。試食した昆虫はイナゴとコオロギで、加熱・乾燥させ食塩で味付けしたものです。一番気になった味については、個人の感想になりますが、うま味がエビ等の甲殻類に比べると、劣っているように感じました。しかし、味付けや調理法次第では、おいしく食べることができそうです。食感は、昆虫は節足動物であることから、乾燥させたエビとほとんど変わりません。ただ肢は他の部分に比べると硬く、口に残ります。昆虫の肢が発達していること

を、食べた経験からも実感できました。試食に特に大きな抵抗を感じなかった私としては、昆虫も食の一つの選択肢になるのではないかと思います。

命をいただくという点では、昆虫も家畜も変わりませんが、食料として受け入れられるかどうかは、経験がない人にとって、大きな差があります。今後更に味や食感、栄養をはじめ、あらゆる観点から食料としての可能性を追究していくことで、昆虫食に対するとらえ方が変わってくるかもしれません。富山県でも、せんべいやクッキーなどの昆虫食が販売されている店があります。関心がある方は、ぜひ一度試してみてください。



ショウリヨウバッタ



試食した昆虫

教育相談 連載

枠からはみ出す

教育相談部 客員研究主事 舘野 智子

「枠からはみ出せないお子さんですよね」。小1の時、担任の先生が私の図工作品を見ながら母に伝えた言葉です。インディアンが頭に付けている羽飾りのような工作でした。教科書の見本に似ていたからでしょうか。母は「のびのび作ればいいってことじゃない？」

と言いましたが、「はみ出せないのはダメなこと」と感じた私は幼心に傷つきました。学生時代はもちろん社会人になってからも、事あるごとに思い出し、つきまとわれてきました。

枠からはみ出せないとは、どんな意味をもっていたのか。担任の先生は、少なくとも、子供たちを型にはめようとはしていなかったと読み取れます。母のしつけが厳しいと指摘したかったのかもしれないし、先生自身が教師という枠からはみ出せない自分を私に重ね合わせていたのかもしれない。

改めて枠について考えてみました。私たちの心の中には、「こうあるべき」とか、「こうしなければならぬ」「普通はこう」といった考えや思いがあります。幼

い頃はほんやりしていますが、親のしつけや学校教育、社会規範に触れることで定型を意識させられていきます。ある程度の型はあった方が楽なことも多いでしょう。でも、枠は自分でつくるものであり、それが生き方の基準となつて、自分を変えてゆくことに開かれるように思います。

教室を飛び出した小3男子は、廊下の隅でペットボトルのキャップで作ったコマを回していました。一緒にやろうと誘ってくれたけれど、うまく回せない私に、「これが最強」とニコツとしながら手渡しました。どんな姿も彼なのです。相談室で語られる言葉には、「はみ出したいけど、はみ出たくない」という心が見え隠れしています。

「枠からはみ出したい」と思い続けた私。2度の転職を経て、目の前に現れる姿や言葉と共に揺れ、味わいながら、問いかけることが今のところ仕事になっています。言霊とはいうけれど、一体いつまでとらわれていくのかな。

